

第6章 総括

第1節 鳥取県東部における平安時代中期から中世前期の土師器について

第4章で述べてきたように、下坂本清合遺跡2区の出土遺物は、一部ピット内からの出土はみられたものの、大半は自然流路内（18流路、36流路、163流路）からの出土である。

これらの遺物は自然流路内出土という性格上、ある程度様々な時期の遺物が入り混じっている可能性は避けられない。よって遺物それぞれの年代を検討するにあたっては、その地域における他遺跡出土の遺物から導き出された編年に頼らざるを得ない。

下坂本清合遺跡2区で検出した遺構の中心となる時期は平安時代中期から中世前期（およそ10世紀～13世紀）と考えられる。因幡における該期の土器変遷については、谷口恭子氏により鳥取市山ケ鼻遺跡SK14出土遺物について出土層位別に6段階（Ⅰ～Ⅵ期）の変遷案（谷口1996）が示されて以降、諸氏により様々な変遷案が示されている（八峠1998・2000・2004、筒井他2004、中森2012、岡田・八峠2014）。

第19表は、鳥取県東部における当該期の土師器出土遺構について、それぞれの研究者における変遷及び年代観をまとめたものである。良好な出土状態での遺物が限られるためもあるが、この表にみるように、変遷案が示される毎に基準となる遺物が入れ替わり、年代観も前後している状況である。特に八峠変遷案については、数次にわたる改訂がおこなわれているが、（八峠1998・2000・2004、岡田・八峠2014）、改訂の都度それまでの変遷案との変更点及びその変更理由が明確に示されていないため、変遷案の妥当性を検証する上で課題があるといえる。また中森変遷案（中森2012）については、土師器杯・皿について器種・器形毎の変遷案が明示されているが、年代観を示すことについては慎重な姿勢であり、具体的な年代観が示されていない。鳥取県東部における当該期の土師器編年について第19表のように様々な意見がある中で、基軸となし得る具体的な年代観が提示されるに至っていない点は惜しまれる。

そこで本節では、下坂本清合遺跡2区で検出された各遺構の存続年代を明らかにするため、鳥取県

第19表 鳥取県東部における10～13世紀の土器変遷案比較

	谷口1996	八峠1998	八峠2000	筒井ほか2004	八峠2004	中森2010	中森2012	岡田2014	八峠2014
9世紀	後葉 山ケ鼻ⅡSK14-Ⅰ期		岩吉ⅣSX01			山ケ鼻ⅡSE01 花原窯3号窯		岩吉ⅣSD05 大井聖坂Ⅳ区 SK06	
10世紀	初葉 山ケ鼻ⅡSK14-Ⅱ期		山ケ鼻ⅡSK14-Ⅰ期 山ケ鼻ⅡSK14-Ⅱ期 山ケ鼻ⅡSK14-Ⅲ期 山田窯12号窯 山田窯10号窯	山ケ鼻ⅡSK14-Ⅰ期 山ケ鼻ⅡSK14-Ⅱ期 山ケ鼻ⅡSK14-Ⅲ期	山ケ鼻ⅡSK14-Ⅱ期 山田窯12号窯 岩吉ⅣSD-X(一部) 岩吉ⅣSD-05		山ケ鼻ⅡSK14-Ⅱ期 ----- 山ケ鼻ⅡSK14-Ⅲ期 -----	岩吉ⅣSDZ 古市ⅠC区SE03 山田窯10・12号窯	山ケ鼻ⅡSK14-Ⅲ期 山ケ鼻ⅡSK14-Ⅳ期 古市ⅡSE-B01 古市ⅡSE-B03
11世紀	前葉 山ケ鼻ⅡSK14-Ⅲ期	山ケ鼻ⅡSK14-Ⅲ期 (一部) 岩吉ⅣSDX 秋里(マシヨ)SK16 遺構外	山ケ鼻SD20	山ケ鼻ⅡSK14-Ⅳ期	山ケ鼻ⅡSK14-Ⅲ期 山ケ鼻SD20 岩吉ⅣSD-X(一部)		山ケ鼻ⅡSK14-Ⅳ期 ----- 菖蒲B区SK01 秋里(土地区画) SRO-01 ----- 本高円ノ前SK10 菖蒲遺跡SD03 -----		秋里(マシヨ)SB01P3 内海中寺ノ谷SKA01
12世紀	初葉 山ケ鼻ⅡSK14-Ⅳ期	秋里(マシヨ)SB01 P3 秋里(マシヨ)SK16	秋里(マシヨ)SB01 秋里(マシヨ)SK16	山ケ鼻ⅡSK14-Ⅴ期	山ケ鼻ⅡSK14-22層 山ケ鼻ⅡSK14-Ⅴ期 秋里(マシヨ)SB-01P3 秋里(マシヨ)SK16(一部) 秋里(マシヨ)B区第5・6層 秋里DⅢ区交差点SK02				山ケ鼻ⅡSK14-Ⅴ期 秋里(マシヨ)SK15・16 菖蒲B区SK01 卯垣ギトリSK14・15
13世紀	後葉 山ケ鼻ⅡSK14-Ⅵ期	山ケ鼻ⅡSK14-Ⅳ期 菖蒲B区SK01 秋里DⅢ区交差点 SK02		山ケ鼻ⅡSK14-Ⅵ期	山ケ鼻ⅡSK14-Ⅵ期 秋里(マシヨ)SK16(一部) 菖蒲B区SK01 大井家ノ下モ遺構外		秋里(マシヨ)SK15 西大路土居SK49 山ケ鼻ⅡSE02		山ケ鼻ⅡSE02 大井家ノ下モ遺構外

※編年内で前後の時期が重複するものは、前の時期を優先して示した。

東部における当該期の土師器の変遷及び年代観について整理を試み、当遺跡2区出土の遺物の年代観の明確化を図るものとする。対象地域の鳥取県東部とは現在の鳥取市以東とする^(註1)。

(1) 検討対象遺構の抽出

まず検討対象遺構の抽出を行った。抽出の基準を条件①：一括性が高いもの。条件②：複数の器種が供伴していること。条件③：貿易陶磁など時期の推定できる遺物が伴っていること、とした。ただし当該期の因幡においては良好な出土状況を示す資料が少ないため、条件①は絶対条件としつつも、これに条件②、③のうち少なくとも一方を満たすことを条件として抽出した。そのため溝や自然流路など、複数時期に亘って機能したと考えられる遺構からの出土遺物は基本的に対象外とした。

(2) 検討方法

まず検討対象期間全般に亘って存続し、帰属時期による形態的特徴が最も発現すると考えられる坏について、同一遺構内から出土したものを検討し、各時期の法量及び形態的特徴をもとに分類案を作成した。

次に貿易陶磁器などで帰属時期の想定できる遺構を時間軸毎に並べ、坏の各分類の時間的変遷について把握するとともに、その妥当性を検証した。

最後に坏で確認した形態的変遷をもとに、共伴する皿・鍋・甕について出土遺構毎に並べ、形態的分類及び器種構成を加味した変遷を検討・把握した。次項にその結果を整理して示す。

(3) 分類

土師器の坏と皿について、形態的特徴を基に以下のように分類した。

【土師器坏】(第103図)

坏ア：底部から口縁部まで直線的、あるいはやや内湾しつつ外傾するもの。

法量に特大・大・中・小が認められる。

坏イ：体部が明瞭に内湾し、口縁部やや外傾するもの。

坏ウ：体部中位がくびれ、口縁部外反するもの。

坏エ：広い平底から直線的に外傾するもの。

高台付坏

足高高台付坏

【土師器皿】(第104図)

皿ア：体部が外湾しつつ外傾するもの。皿部の浅いものと深いものがある。

皿イ：底部が高台状に突出し、体部が内湾しつつ外傾するもの。

皿ウ：底部平底で、体部が緩く内湾しつつ外傾するもの。

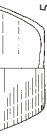
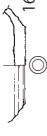
皿エ：平底の底部が口径に比して広く、体部が緩く外湾しつつ外傾するもの。

高台付皿：皿部の浅いものと深いものがある。

柱状高台：坏の可能性もあるが、今回は皿に含めた。

皿ウについては、さらに細分できる可能性があるが、今回は細分までは至らなかった。また煮炊具については、今回対象となるものが少なく、分類も甕・鍋・瓦質鍋・瓦質羽釜とするに留めざる得なかった(第105図)。

S=1/8

		壊工	高台付坏	坏ア			坏イ	坏ウ	足高台付坏
				特大	大	中	小		
900	I期	 山ヶ鼻 SK14 I期-157	 山ヶ鼻 SK14 II期-117	 山ヶ鼻 SK14 II期-113	 山ヶ鼻 SK14 II期-114	 山ヶ鼻 SK14 II期-115	 山ヶ鼻 SK14 II期-116		
		 山ヶ鼻 SK14 II期-128			 山ヶ鼻 SK14 III期-41	 山ヶ鼻 SK14 III期-43	 山ヶ鼻 SK14 III期-46		
					 山ヶ鼻 SK14 III期-37	 山ヶ鼻 SK14 III期-38	 山ヶ鼻 SK14 III期-49		
1000	II期				 内海中寺ノ谷 SKA01-4		 山ヶ鼻 SK14 IV期-17		
							 山ヶ鼻 SK14 III期-50		 山ヶ鼻 SK14 III期 63
							 内海中寺ノ谷 SKA01-6		
1100	III期				 菅蒲 B 区 SK01-33	 菅蒲 B 区 SK01-41	 菅蒲 B 区 SK01-37	 菅蒲 B 区 SK01-39	
						 秋里 (ア) SK16-5	 本部円ノ前 SK10-2		
1200	IV期								

凡例
 ◎：底部回転糸切り
 □：底部回転ヘラ切り
 ※遺物下部キャプションの内容は以下のとおり
 (遺跡名) - (掲載番号)
 【例】 菅蒲 B 区 SK01 - 77

第 103 図 鳥取県東部における 10～13 世紀の土師器坏の変遷

(4) 変遷

これらの土器類を、以下のⅣ期8段階の変遷で捉えることができる考える（第103～105図）。

【Ⅰ期】

土師器主体となる時期で、谷口変遷案（谷口1996）で山ヶ鼻遺跡SK14Ⅱ期とされる土器群が該当する^{（註2）}。

坏の一部には回転ヘラ切りの坏エ（2）がみられるが、土師器において回転糸切りが主体となる。大型の高台付坏（3）のほか、坏アは特大・大・中・小と法量分化が認められる。このうち特大とした4は高台付坏とほぼ同法量、同形状である。坏アの体部は直線的に立ち上がるものからやや内湾する傾向になる。

皿は皿ア、皿エ、高台付皿が認められる。皿エ（31）は前代の底部回転ヘラ切りのもの（30）から回転糸切りへと切り替わる。高台付皿及び皿アは浅いもの（32・36）と深いもの（33・37）がある。

【Ⅱ期】

皿イ、皿ウが登場し、皿の器種分化が認められる時期としてⅡ期を設定した。また主に坏の形態変化によってⅡ期を3段階に分けた。いわゆる足高高台付坏及び柱状高台（橋本1994）の出現もこの時期であり、土師器の器種が多様化する時期であると評価できる。

（Ⅱ期1・2段階）

山ヶ鼻遺跡SK14Ⅲ期とされる坏アは体部の外傾度合によってやや外傾するもの（8・9・10）と強く外傾するもの（11・12・13）が認められ、法量も前段階のⅠ期と同じくそれぞれ大・中・小と揃っている。そのため、これらの形態差は時期差を反映したものと考え、Ⅰ期坏アの形状との比較から、前者が古く後者が新しい特徴であると判断し、それぞれⅡ期1段階、Ⅱ期2段階と把握した。従って他の坏イ（21）、足高高台付坏（28・29）及び皿、甕も2時期に分けられると考えられるが、資料不足で分類に至らなかった。そのため、これらについてはⅡ期1・2段階と一括した。前述したように、この時期に皿イ（46）、皿ウ（49・54）、足高高台付坏（28・29）が加わる。坏イとした21については、次項でⅡ期3段階に位置づけた22のプロトタイプと捉えたが、系譜を異にする可能性もあり、更なる検討が必要と考える。

（Ⅱ期3段階）

大きな傾向として、Ⅱ期2段階に体部外傾度が最大となった坏アは、Ⅱ期3段階になって11から14への変化のように器高を減じ始める可能性があるが、資料不足で判別は難しい。坏イ（22）はⅡ期1・2段階の21に比して大型化しているが、法量が分化している可能性もある。そのほかこの段階の特徴としては、Ⅱ期2段階に比して皿の法量が縮小し、柱状高台（61・62）が出現する点が挙げられよう。内海中寺ノ谷遺跡SXA01（財団法人鳥取市文化財団2005）出土土器及び山ヶ鼻遺跡SK14Ⅳ期とされる土器群がこの段階に相当する。

【Ⅲ期】

皿が明瞭に小型化（口径8cm前後）して、いわゆる小皿となり、土師器鍋が出現する時期をⅢ期とした。Ⅲ期は坏の形態及び瓦質鍋の有無により2段階に分けた。

（Ⅲ期1段階）

坏アは前段階のⅡ期3段階と法量、形態とも類似しており明確に分類することはできない。Ⅱ期には認められなかった特大の坏アは、大型に位置づけられる17よりも底径の大きな16が認められるこ

S=1/8

		皿工	高台付皿		皿ア		皿イ	皿ウ		柱状高台
			浅	深	浅	深				
900	I期									
1000	II期									
1100	III期									
1200	IV期									

凡例
※運物下部キャプションの内容は以下のとおり
○：底面回転承切り
□：底面回転へう切り
【例】 高瀬 B 区 SK01 - 77

第104図 鳥取県東部における10～13世紀の土師器皿の変遷

とから、Ⅰ期以降当該期まで特大の坏アが存続していた可能性がある。Ⅲ期 1 段階の特徴は、皿の明瞭な小型化と土師器鍋の出現であろう。また後に坏の主たる器種となっていくと考えられる坏ウ (24) もここで出現している。坏イも前段階に比して大型の 23 が認められる。鳥取市菖蒲遺跡 B 区 SK01 出土土器 (財団法人鳥取市教育福祉振興会 1994) のほか、山ヶ鼻遺跡 SK14 V 期とされる土器群が当該期に相当する。

(Ⅲ期 2 段階)

瓦質の鍋 (75) 及び羽釜 (77) が確認できるのは当該期からである。坏アの器壁が厚くなる (19・20) ことから、Ⅲ期を 2 段階に分離してみた。また当該期とした皿は、厚めの底部で、口縁端部が細く尖る特徴をもつ (52・57) ことなども年代的指標としうる可能性もあるが、型式差として捉え得るかどうか現段階では判断しかねる。今後の資料の増加を待ちたい。Ⅱ期 3 段階に引き続き柱状高台 (63・64) が認められる。秋里遺跡 SK16 (財団法人鳥取市教育福祉振興会 1996)、本高円ノ前遺跡 SK10 (財団法人鳥取市文化財団 2004) 出土土器及び山ヶ鼻遺跡 SK14 VI 期とされる土器群が当該期に相当する。

【Ⅳ期】

坏アがみられなくなり、坏ウが主流となる。皿の形態変化から 2 段階に分けた。

(Ⅳ期 1 段階)

類例が乏しいため即断できないが、鳥取県東部では、この段階に坏アに替わって坏ウが坏の主体となるものと考えられる。皿はア～ウまで認められ、法量の縮小化が頂点に達し、口径 7 cm 前後と最も小さくなる (42・43・48・53・58)。

煮炊具については、前段階に引き続き瓦質の鍋及び羽釜が認められる (76・78・79)。

そのほか、当該期と考えられる山ヶ鼻遺跡 SE02 (財団法人鳥取市教育福祉振興会 1996) の出土遺物中に、土師器甕の口縁部 (72) が認められる。土師器の器種変遷における全体的な流れから、土師器甕はⅡ期に消滅し、Ⅲ期には土師器鍋に替わるものと見込まれ、72 は古い時期の遺物が混入したものと解釈したいが、例外的に扱ってよいものかどうか現段階では判断しかねる。今後土師器甕の存続期間についても改めて検討する必要があるのではないだろうか。

当該期の土器群としては、山ヶ鼻遺跡 SE02 のほか、秋里遺跡 SK15 (財団法人鳥取市教育福祉振興会 1996) 及び山ヶ鼻遺跡 SK14 VI 期とされるものが相当する。

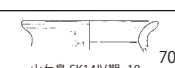
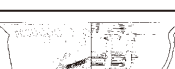
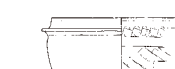
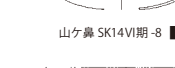
(Ⅳ期 2 段階)

これまで小型化の一途を辿っていた皿に、やや大型化が認められる (44・45・60) ことからⅥ期 1 段階と分離しⅥ期 2 段階とした。Ⅵ期の皿は、これまでの皿アや皿ウの系譜で捉えられるが、供伴する坏ウ (25～27) との形態的類似性が高く (第 103 図)、何らかの意図で坏ウをスケールダウンさせたものを作製したの可能性も考慮すべきかもしれない。

煮炊具は、土師器鍋 (74) が認められる。底部まで残存していないが、丸底を指向する形態をしており、平底気味であるⅢ期 1 段階の 73 との形態差をみせる。また瓦質の鍋及び羽釜は当該期に良好な資料を見いだせないが、14 世紀以降も存続していることが確認できる (加藤 2007)。

秋里遺跡 D Ⅲ区 SK02 (財団法人鳥取市教育福祉振興会 1996)、卯垣ギットリ遺跡 SK14・15 (財団法人鳥取市文化財団 2013) 出土土器が当該期に相当する。

S=1/10

		甕	鍋	瓦質鍋	瓦質羽釜
900		 山ヶ鼻 SK14 I 期-158 67			
	I 期	 山ヶ鼻 SK14 II 期-130 68			
1000	1 段階	 山ヶ鼻 SK14 III 期-72 69			
	2 段階				
	3 段階	 山ヶ鼻 SK14 IV 期-18 70	 内海中寺ノ谷 SXA01-7 71		
1100	I 期		 山ヶ鼻 SK14 V 期-10 73		
	II 期				
1200	1 段階			 山ヶ鼻 SK14 VI 期-4 ■ 75	 本高円ノ前 SK10-3 ■ 77
	2 段階				
1200	I 期	 山ヶ鼻 SE02-3 72		 山ヶ鼻 SE02-5 ■ 76	 山ヶ鼻 SK14 VI 期-8 ■ 78
	II 期				 山ヶ鼻 SE02-4 ■ 79
1200	1 段階				
	2 段階		 秋里 D III 区交差点 SK02-3 74		

凡例

■: 瓦質土器

※遺物下部キャプションの内容は以下のとおり

(遺跡名) (遺構名) - (掲載番号)

【例】 菖蒲 B 区 SK01 - 77

第 105 図 鳥取県東部における 10～13 世紀の甕・鍋の変遷

(5) 年代

次に、各段階の想定される実年代について述べる。

まず実年代を想定できる遺物について述べる。I 期の前段階にあたる山ヶ鼻遺跡 SK14 I 期土器（1・30・67）を包含する層中より検出した炭化物の放射性炭素年代測定結果の歴年代交点（AD895）から山ヶ鼻遺跡 SK14 I 期が 9 世紀末を前後する時期と想定できることから、続く I 期の上限は 10 世紀初頭と考えられる。

次に年代が想定できるのは、11 世紀後半から 12 世紀後半に比定される白磁碗Ⅳ類（太宰府市教育委員会 2000）が出土している II 期 3 段階とした内海中寺ノ谷遺跡 SXA01 と、Ⅲ期 1 段階とした菖蒲遺跡 B 区 SK01 である。

そしてⅣ期 1 段階の山ヶ鼻遺跡 SK14 Ⅵ期土器群には 12 世紀後半から 13 世紀前半に比定される東播系須恵器鉢Ⅱ B2 類（佐藤 2013）が、同じくⅣ期 1 段階の山ヶ鼻遺跡 SE02 からは、13 世紀前半に比定される龍泉窯系青磁碗Ⅱ -b 類（太宰府市教育委員会 2000）が出土している。続くⅣ期 2 段階の秋里遺跡 D Ⅲ区 SK02 から 13 世紀中頃と考えられる三足羽釜（鳥取市教育福祉振興会 1996）が出土している。

以上をまとめると、以下ようになる（※は年代推定遺物のない段階）。

- 9 世紀末（山ヶ鼻遺跡 SK14 Ⅰ期：放射性炭素年代測定）
- 10 世紀初頭～ …… Ⅰ期
 - ※Ⅱ期 1 段階
 - ※Ⅱ期 2 段階
- 11 世紀後半～ 12 世紀後半 …… Ⅱ期 3 段階（白磁碗Ⅳ類）
- 11 世紀後半～ 12 世紀後半 …… Ⅲ期 1 段階（白磁碗Ⅳ類）
 - ※Ⅲ期 2 段階
- 12 世紀後半～ 13 世紀前半 …… Ⅳ期 1 段階（東播系須恵器鉢Ⅱ B2 類）
- 13 世紀前半 …… Ⅳ期 1 段階（龍泉窯系青磁碗Ⅱ -b 類）
- 13 世紀中頃 …… Ⅳ期 2 段階（三足羽釜）

以上の実年代想定資料を踏まえ、各段階の年代観を以下のように示しておく。

- Ⅰ期 …… 10 世紀前半
- Ⅱ期 1 段階 …… 10 世紀後半
- Ⅱ期 2 段階 …… 11 世紀前半
- Ⅱ期 3 段階 …… 11 世紀後半
- Ⅲ期 1 段階 …… 12 世紀前半
- Ⅲ期 2 段階 …… 12 世紀後半
- Ⅳ期 1 段階 …… 13 世紀前半
- Ⅳ期 2 段階 …… 13 世紀中頃～

Ⅰ期からⅡ期 2 段階は 10 世紀～ 11 世紀前半を半世紀毎に按分した。供に白磁碗Ⅳ類を供伴するⅡ期 3 段階とⅢ期 1 段階は、白磁碗Ⅳ類以前である 12 世紀後半以前の時期が想定されるⅢ期 2 段階の存在を考慮し、白磁碗Ⅳ類の基準年代である 11 世紀後半～ 12 世紀前半を按分し、それぞれ 11 世紀後半（Ⅱ期 3 段階）、12 世紀前半（Ⅲ期 1 段階）とし、Ⅲ期 2 段階を 12 世紀後半とした。

（6）下坂本清合遺跡 2 区出土土師器坏・皿について

以上の検討を踏まえて、下坂本清合遺跡 2 区で検出された遺構内出土の土師器坏・皿の時期をみると第 106 図のようになる。

下坂本清合遺跡出土の土師器のひとつの特徴として、底部回転ヘラ切りによる坏・皿が一定量含まれる点がある。これについては、鳥取県内では底部回転糸切りが主体となる 10 ～ 12 世紀にあって回転ヘラ切りの皿が多く出土している米子市錦町第 1 遺跡の土器溜り出土資料（米子市教育文化事業団 1996）のように、岡山県の美作地方との係わりを想定する見解（八峠 1998）などがあり、当遺跡出土の底部回転ヘラ切りの土師器も、他地域との関連性のなかで捉えるべきものである可能性もあるが、今回は一先ず前記の分類案のなかで捉えることとした。

163 流路はⅠ期からⅢ期までの土器が認められる。これらの出土位置をみると、Ⅰ期からⅡ期 2 段階（Po65・66・71・72）までは 36 流路と重複しない箇所から、Ⅱ期 3 段階からⅢ期にかけて（Po52～60・62～64・68・69）は 36 流路と重複する箇所を中心に出土していることがわかる。第 1 遺構面 18 流路、第 2 遺構面 36 流路、第 3 遺構面 163 流路の各段階の調査にあたっては、それぞれの流路の識別にかなりの難渋を伴っており、163 流路出土のⅡ期 3 段階からⅢ期の遺物はあるいは 36 流路の埋土中出土遺物として分離される可能性がある。

この可能性に依拠すれば、出土土器が土師器鍋と瓦質鍋のみであった 36 流路の機能した年代はⅡ期 3 段階からⅢ期にかけての時期（11 世紀後半～12 世紀）である、36 流路前段階の 163 流路の機能した段階はⅠ段階からⅡ期 2 段階（10 世紀～11 世紀前半）と整理しうる。なお、湿地状堆積となった段階である 18 流路からの出土土器（Po6・7）は、36 流路と重複する地点から出土したことから、これらも前段階の流路から混入した可能性があり、18 流路の堆積は 13 世紀以降に降る可能性も考えておきたい。また 178 流路（第 84 図）の埋没最終段階に残存した流路の痕跡と考えられる 135 流路（第 74 図）から出土した土師器（Po48・49）は、Ⅱ期 2 段階から 3 段階のものが認められるため、163 流路機能段階から 36 流路が機能し始める時期に埋没したものと判断される。

続いて、流路以外の遺構出土土師器をみる。133 落ち込み出土の坏ア（Po44）は、内海中寺ノ谷遺跡 SXA01 出土の土師器坏（第 103 図 14）に胎土及び形状が酷似することからⅠ期 3 段階に、皿イ（Po45）は法量から、第 104 図皿イのⅡ期 1・2 段階（46）とⅢ期 1 段階（47）を繋ぐⅡ期 3 段階に相当すると考えられ、133 落ち込みの年代は、概ねⅡ期 3 段階（11 世紀後半）に当てられよう。

掘立柱建物 3 を構成する 140 ピットからも、坏ア（Po28）と皿イ（Po27）が出土している。Po27 はやや小型化しており 133 落ち込み出土のものより新しい様相を呈するが、Ⅱ期 3 段階（11 世紀後半）の範疇で捉えられると考えられる。また Po28 は、体部の外傾度からⅡ期 3 段階～Ⅲ期Ⅰ段階（11 世紀後半～12 世紀前半）と判断されるが、Po27 と共伴することから、Ⅱ期 3 段階と捉えることができる。よって掘立柱建物 3 は 11 世紀後半の時期が充てられよう。掘立柱建物 6 を構成する 146 ピット出土 Po38 はⅡ期 3 段階からⅢ期 1 段階（11 世紀後半～12 世紀前半）であろう。掘立柱建物 1 を構成する 23 ピット出土の皿ウ（Po24・25）及び柵列 1 周辺ピット群の 81 ピット出土皿ア（Po29）は、その法量からⅢ期（12 世紀代）と考えられる。

2 耕作痕出土皿ウ（Po1）は底部のみの破片で判断は難しいが、Ⅱ期 3 段階からⅢ期 1 段階（11 世紀後半～12 世紀前半）、4 耕作痕中出土坏ア（Po39）も体部の外傾度が最大となり、やや器高が低くなるという特徴を有することから、同時期と考えられる。同じく 147 土坑出土の Po46 は、全体の器形がわからないため判断は難しいが、器壁が厚くなる特徴から、Ⅲ期 2 段階（12 世紀後半）にあたりそうか。4 耕作痕出土の坏ア（Po40）も同様にⅢ期 2 段階と捉えておく。

このようにみてくると、調査区北半部に展開する遺構群は、Ⅱ期 3 段階からⅢ期 2 段階（11 世紀後半～12 世紀）のものであり、36 流路の機能時期と重複するといえる。

また、13 世紀代（Ⅳ期）以降については、163 流路中より出土した貿易陶磁器（Po81・82）や瓦質鍋、三足羽釜（Po73）などが確認できるが、前代に比して希薄である。次に確認できるのは近世の遺物であるというのも特徴的であり、2 耕作痕の新段階及び 29 畦畔が近世段階と考えられることと併せて、13 世紀以降の当該地の姿が不明瞭である。

S=1/8

900			1000			1100			1200		
I 期			II 期			III 期			IV 期		
1 段階			2 段階			3 段階			1 段階		
2 段階			1 段階			2 段階			2 段階		
坏ア						 133 窠 Po44	 4 耕作痕 Po39	 147 土坑 Po46	 4 耕作痕 Po40		
						 3(148)Pi Po28	 6(146)Pi Po38				
坏イ							 18 流路 Po9	 18 流路 Po10			
足高高台 付坏			 163 流路 Po72	 163 流路 Po71							
皿ア	 163 流路 Po66							 163 流路 Po52	 18 流路 Po6		
皿イ	 135 流路 Po48	 18 流路 Po68	 133 窠 Po45	 3(140)Pi Po27	 163 流路 Po63						
皿ウ			 163 流路 Po61	 135 流路 Po49	 2 耕作痕 Po1	 163 流路 Po53	 163 流路 Po54	 163 流路 Po55	 163 流路 Po56	 163 流路 Po57	 163 流路 Po58
柱状 高台			 163 流路 Po68	 163 流路 Po69		 163 流路 Po59	 163 流路 Po60	 18 流路 Po7	 123Pi Po24	 123Pi Po25	

※遺物下部キャプションの内容は以下のとおり
(遺物名) (編號番号)
【例】 18 流路 Po9

凡例
◎：底部回転係切り
□：底部回転係ラ切り

第 106 図 下坂本清合遺跡 2 区 遺構内出土土器坏・皿 時期別対応図